

港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

## 国産最初期のグランドピアノ

野口 朋子  
(学芸員)

“楽がく器の王様”と称され、子どもに習わせたい楽器では首位を占め、誰もが自由に弾けるよう街中に置かれることもある楽器、それはピアノです。弾ける弾けないにかかわらず、ピアノは人々の生活の中に馴染み深くとけ込んでいます。

18世紀の初めにイタリアで誕生したピアノは、江戸時代後期に日本へもたらされました。日本で最初にピアノ製造に取り組んだひとりに山葉寅楠やまは とらくすがいます。明治20(1887)年、アメリカ製オルガンの修理をきっかけにオルガン製作を始めた寅楠は、日本楽器製造株式会社を興しました。その後試行錯誤を重ね、明治33年にアップライトピアノ、2年後にグランドピアノを作り上げ、国内需要や海外輸出を拡大し、目覚ましい成長を遂げました。この会社が、いまやピアノの世界トップシェアを誇るヤマハ株式会社の前身です。

ところで、寅楠が携わったであろうグランドピアノが、港区の赤坂子ども中高生プラザにあります。ここはもと氷川小学校でした。昭和5(1930)年に新校舎に建て替えられた際に、小学校の向かいに住んでいた九条家から「皇太后使用のピアノ」として寄贈されました。皇太后とは大正天皇妃節子・貞明皇后のことで、九条家は実家にあたります。

このピアノを見てみましょう。まず最初に目を引くのは、その装飾性です。側面にあらわされた金の模様や曲線的な脚、優美な譜面台が、現代のピアノとは異なる存在感を放ちます。その構造や材質も特徴的で、黒い塗膜は黒漆、金の模様は蒔絵まきゑなのです。描かれているのは鳳凰や尾長鳥など、日本古来の有職文そくもんにちなんだ図柄です。屋根をあげると、内部の金属フレームには菊唐草模様が色鮮やかに描かれ、「YAMAHA PIANO Co.」の文字が鑄出いだされています。専門家の分析によると、内部の金属部分は諸外国からの輸入品きょうぼんで、響板きょうばん(共鳴体)やボディは日本製とのことです。つまり、外国製の部品を組み合わせ、日本の伝統的な工芸技法を用いて作り上げた、当時としては最先端の楽器だったのです。製造をはじめた当初、

ヤマハが年間に生産できたピアノの台数は一桁台ひとけた。技術を結集して作り上げたピアノを国内外の博覧会に出品し、多くの賞を得ました。それと同時に、宮内省や文部省など官公庁に納入し、皇族や華族のお買上にもなっています。

明治36年3～7月開催の第5回内国勸業博覧会ないこくかんぎょうに出品されたヤマハのピアノは、同年8月に昭憲皇太后のお買上となり、12月に貞明皇后へ贈られました(「御用度録」・「貞明皇后実録」宮内公文書館蔵)。博覧会の写真帖に写るピアノは、港区に現存するこのピアノとよく似ています。また昭和11年にヤマハの創業50周年を記念して作られた『山葉の繁しげり』に「昭憲皇太后お買上のピアノ」として紹介されるピアノもまた、これとよく似ています。つまり、このピアノは、博覧会出品後に昭憲皇太后から貞明皇后へ贈られたピアノである可能性が高いと考えられるのです。

九条家から寄贈を受け、氷川小学校で長らく大切に使われてきたこのグランドピアノは、ヤマハの草創期に最善の力を尽くして作り上げられた国産最初期のピアノです。日本のピアノ産業史の黎明期れいめいを彩る貴重なピアノであることから「日本楽器製造株式会社製初期グランドピアノ」として、このたび令和4(2022)年度の港区指定文化財に指定されました。企画展「未来に伝えよう!みなと遺産 新指定文化財展」(2023年1月14日～3月12日)では、そのみどころをパネル紹介いたします。

赤坂子ども中高生プラザにて見学可能(令和4年12月現在)



港区立郷土歴史館

## 歴史館だより

旧協働会館（伝統文化交流館）保存修理工事こぼれ話  
芝浦見番時代の床柱川上 悠介  
(学芸員)

芝浦にある港区立伝統文化交流館は、昭和11（1936）年に芝浦花街の見番（組合事務所）として建てられた木造2階建ての建物で、港区指定有形文化財として保存しながら伝統文化の継承やコミュニティ活動、地域交流の拠点として活用されています。

この建物は8年ほど見番として使われた後、昭和19年から平成12（2000）年まで東京都港湾局によって港湾労働者の宿泊施設「協働会館」として長らく使われていました。平成21年に港区が譲り受け、平成30年から令和元（2019）年にかけて修理し、翌年に港区立伝統文化交流館として開館しました。

本稿では、令和の改修工事中に「土の中から発見」された一本の床柱を紹介します。発見された床柱は、伝統文化交流館展示室の床の間のもので、現在設置されている床柱は当初の柱ではなく、新規製作されたもので、ごく



令和の改修で復元された伝統文化交流館展示室の床の間。床柱は新規製作

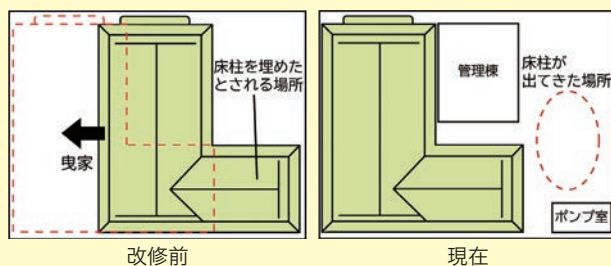
一般的な一辺約100mm程度の柱ですが、発見された床柱は、直径約200mmの自然木の形をいかした迫力ある丸柱です。ではなぜ今回の復元工事でその柱が使われなかったのか。そもそも「土の中から発見」とはどういうことかを説明します。

この部屋は、戦後まもなく台所として使うために床の間を撤去する大改修が行われており、シンクや調理台のある台所となっていました。今回の改修工事でこの台所を解体したことにより、建設当初の床の間の痕跡がみつき復元することが決まりました。しかし、床柱は撤去されておりその形状は不明のままです。そのため、今回の復元工事では一般的な太さの床柱で工事が進められていました。ところが、

完成まであとわずかの令和元年11月、建物の工事もほぼ終わり、敷地の外構工事に入った際、貯水槽を設置する目的で地面に大きな穴を掘っていたところ、太い大きな柱が出土しました。木材が出土することはめったにありませんので、一同驚きと同時に、長さや形状からこの建物の床柱であることが推定されました。この建物は、今回の工事で敷地北東部から南西部に曳家され、床柱はもともと建物が立っていたあたりから発掘されました。建物を曳家しなければ出土することはなかったことでしょう。



土の中から発見された床柱



さらに偶然は重なります。発見後の令和2年1月には、この床の間の前で撮影された写真が周辺の住民の方への聞き取り調査で見つかると同時に協働会館の元管理人の方からも、「床柱を戦後の改修時に建物内部の床をはがした際、土の中に埋めた」という証言が得られ、この柱はこの建物に設置されていた当初の床柱であることが明らかとなりました。（※写真は伝統文化交流館でパネル展示されています）。

出土した床柱は、現在、伝統文化交流館の中庭に保管されています。70年近く地面に埋まっていた木材なので再利用は難しいかもしれませんが、芝浦見番の往年の姿を今に残す貴重な資料です。